



# みどりの風

令和5年11月30日発行  
校報 614号  
(みどりの風 156号)  
練馬区立関町北小学校

## 挨拶の満ち溢れる素敵な学校

校長 吉川文章

「おはようございます」「ありがとうございます」「失礼します」

心のこもった礼儀正しい挨拶が校内に飛び交っています。特に学校のリーダーである6年生の挨拶は「素晴らしい」の一言です。来訪者の方から「挨拶ができる子供たちですね」という言葉をいつもいただきます。挨拶は、学校だけで身に付くことではありません。「保護者の方や地域の方による教育があってこそ」と考えています。

師走を迎えるにあたって、私の「生い立ち」の一部を載せさせていただきます。

「どうもありがとうございました」「お世話になりました」腰が折れるほど頭を下げてお礼を言う母親の姿。それが私の教育の原点です。まだ園児で5歳に満たない頃の私は、その母親の姿を「ある時」に限って、いつも不思議に思っていました。「ある時」とは、買い物をしてお金を払うとき、バスに乗車して目的のバス停で降りるときなどです。普通はお店の方や運転手さんから「ありがとうございます」の言葉があるだけなのに、私の母親は、その後に必ずお礼を言うのでした。「お母さん、不思議だな。なぜお礼を言い返しているのだろう」という疑問がありました。母親のようなお礼を言う人はほとんどいません。小学校に上がった頃には、成長とともに「不思議さ」は感じなくなりました。母親がお礼をするのを見る度に誇らしい感情になりました。小さい頃の記憶はあまりない私ですが、頭を下げる母親の姿とお礼をする時の実際の言葉はよく覚えています。母親にその理由を聞いたことは一度もありませんでした。中学2年生の頃の話です。「ご多分にもれず」、私も反抗期となりました。語彙力が乏しかったせいか親から話しかけられても口を聞かないという反抗の仕方をしていました。父親に声をかけられても全く返事をせず雷を落とされる度に、母親がいつも言う言葉がこれでした。「お父さんもう許してやってください。ご近所で挨拶をよくしている文章（ふみあき）だから」

10年ほど前に、子供の頃の素朴な疑問を母親に投げかけました。母親は、「そんなことがあったかのう」と記憶をたどりながら以下のような答えを返してくれました。

「お店の人などへのあいさつは当たり前と思ってしていた」「別に誰から教えてもらったわけではないと思う」「そう言えば、母親が礼儀正しいあいさつをする人だった」

私も、母親に「挨拶をしなさい」と教えられたことは一度もありません。でも、気がついた時には地域の方や目上の方、先生、先輩、上司への挨拶だけは身に付いていて、自分の長所となっていました。不器用で要領が悪く決して「世渡り上手」とは言えない私でしたが、挨拶のおかげでずいぶん得をしてきました。教師になることができたのも挨拶のおかげだったかもしれません。

「子供は親の背を見て育つ」。私は、関町北小に挨拶が根付いている一番の理由は、保護者や地域の皆さまが、子供たちの手本となり挨拶をしてくださっているからだと考えています。今年度、多くの地域行事が始まりましたが、学校応援団、関地区委員会の皆さまの笑顔の挨拶に頭が下がります。

関北地域は、地域とも一体となった「あいさつ活動」が展開される素晴らしい地域です。教師、保護者、地域に限らず、全ての大人が模範となり、学校を起点にして挨拶がさらに地域全体に広がる町を共に目指していきましょう。

ご来校なさる保護者の皆さんも、全ての子供たちと、教職員と笑顔いっぱいの挨拶を、交わしてくださいますようお願いいたします。